



## 『ラポール』(rapport)の本質についての一考察

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-03-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 三浦, 賜郎 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24729/00004065">https://doi.org/10.24729/00004065</a>

## 『ラポール』(rapport)の本質についての一考察

三 浦 賜 郎

### 一

ケースワークにおける関係概念の確立以来一切のケースワークは処置関係 (treatment relationship) を前提とするものである。ところがここで問題となる点は処置関係の状況を規定する有機的实在、換言すれば実体の状況 (reality situation) に対する認識である。この問題を明らかにするためにわかれわれは哲学的、心理学的あるいは精神分析学的立場からの接近が夫々可能であろうが、ここでは特にベルグソンの経験論哲学における思想を問題提起において根拠としつつ、処置関係に特有の状況を正当とする倫理的論拠の存在を明らかにしてゆきたいと思う。ところでこのような問題に対する哲学的理解はカントとベルグソンというとらえ方ではなくて、ベルグソンの思想のなかに展開せられていくカント批判という問題提起のなから実体の状況に対する認識を解明してゆかなければならないと考える。なぜなら知られるごとくベルグソンの哲学は「共感」(Sympathie)の哲学であるといわれるごとく、そこにはカントが明白にしたような近代的主体性の概念が所謂直観主義に求められ、新しき形而上学を実践的に求めたカントに対し、ベルグソンは持続の直観に求めつつ神秘的思弁に始終した魅惑性と神秘性にあふる直観主義のなかにおいて「共感」を説いているからである。ケースワークを成立せしめる基本的要素はワーカークライエント関係の確立といわれているが、関係それ自体を規定するものが「共感」であり、しかも共感は直観に基くものであるからである。このよう

に考えるならば関係概念の確立によって成立したケースワークの科学性は、直観主義にもづく哲学のうえにその理論と実践の体系を成立せしめているとみることができよう。そこで小論においてこの点を論ずることによって主題の論理を求めてみたい。

## 二

かつてベルグソンは「われわれが誰でも内から、単なる分析によらず直観によって把握する事象が少くとも一つある。それは時間を通じて流れて行くわれわれ自身である。持続するわれわれの自我である。われわれはその他の如何なるものとも、悟性的に寧ろ精神的に同感することはできない。しかしわれわれは確かにわれわれ自身とは同感する。」<sup>(1)</sup>ということを述べて、自らの哲学を直観主義として位置付けている。換言すれば事象の相対的把握に対する絶対的把握の立場、事象に対する視点を取る代りに事象の中に身を置く立場、分析の代りに直観を主張する立場、これこそ真の哲学であるとして自我の内省的直観によって真なる實在の絶対的把握の可能性を示さんとしたのである。さてベルグソンはこのような立場から人間の条件ともいえる一つの言葉を示している。それは「自分の存在を構成している持続の直観を得ることのできない人には、概念によつてもイメージによつても決してそれを与えることはできない。」<sup>(2)</sup>と。ここでいうそれとは感情、意識、さらには共感へと導かれる人間の内面的構造をさすものである。では實在に対する絶対的把握の可能性を保証するには直観と分析、換言すれば哲学と科学とはいかなる関係にあるかという問題を解かなければならない。たしかにベルグソンによれば人間は直観において我自身による我の持続の内的絶対的な認識が可能であるとされている。ここに哲学と科学の方法上の相異が問題となる。すなわち直観を要求し直観を獲得するものは哲学であるのに対し、科学は分析を求めるからである。この点についてベルグソンは心理学者の「心理的狀態」を説明する思考方法をめぐり矛盾の存在を指摘している。すなわち、自我を分析するということは自我の「状

態」をノートすることであり、いかにそれが我の状態だといつてもノートすることのできた状態を我という一つの符牒をつけているにすぎないものであると、ベルグソンがいわんとしたことは、この「我」の元にある一人の人間に対する直観は心理学者によつては非常に困難なことではないかということである。なぜならば人間の部分的な記法を事象的な部分と考えて、分析の視点と直観との混同、換言すれば科学と哲学との混同が一つの矛盾として存在しているからであるというのである。この混同というものは経験論にも理性論にもとも存在している。しかし眞の哲学が果さなければならぬことは、白我とは生きて働いている具体的な人間の自我の特徴をいかにして把握するかということでなければならぬ。『生きてはたらいっている具体的な自我の特徴を表はし、ビエールとポールを区別すること』こそ哲学の使命であるとベルグソンは述べている。先にも述べたごとく眞なる實在の絶対的把握の可能性を、ベルグソンは自我の内省的直観に依つて保証するのである。これに対してカントは、自我のもとに感性的多様を綜合的に統一する形式的同一性を理解したのである。しかしながらベルグソンによれば、カントのいう感性的多様とは等質的空間のもとに考えられた等質的多様であり、統一とは物質のない形式にすぎないと考へる。なるほどカントによる自我は誰れの自我でもない抽象的自我にすぎないのである。しかし問題はビエールは他人と異なるが故に、ビエールなのであつて、ビエールの本質を形成するものは実に、ビエール自身の持続なのである。それ故にビエールに対する理解はビエール自身の内に入りこみ、その持続を直接的に直覚するのでなければならぬのである。我は我自身であつてビエールではない。だからビエールの持続の直観はただ単なる内省ではなく、直観にもとずく共感でなければならぬのである。それは他者に対する概念的把握でも、あるいはまた自我から他者への類推でもない。まことに自我の白己自身の實在性への、また他の實在性への「魂の鼓動しているのを感じようと志す」<sup>(7)</sup>「一種の精神的聴診」(une espèce d'auscultation spirituelle)なのである。これこそ実にここに論ぜんとするラポールの本質を示す内容なのであるが、ベルグソンはこれこそ本當の経験論であり、これが眞の哲学であるというのである。<sup>(9)</sup>

知られるごとく社会事業ワーカーはクライエントに対する処置関係を確立していく過程において、所謂実体の状況に対する認識は中にはいりこみ、直接にそれを体験し、そのうえ「共感を通じてそれを解釈する」(interpreting it through sympathy)ことなくしては不可能に近いのである。まことにケースワーカーが優れて臨床家たらんとするためには、共感を媒介とした直観の哲学に立脚した精神的聴診なくしてはできないことである。換言すればラポールの形成なくして処置関係の確立は困難であるということになる。ラポールは常に「relation」と区別される概念であることは精神病理学者ベルネーム(Hippolyte Bernheim)が指摘したごとく、相互間の共感によって結ばれた関係概念であるところにラポールの特質をみるわけである。丁度暗示を与える場合に精神分析者と被分析者との間に暗示それ自身が存在するような関係概念なのである。それ故にこそ精神病理の領域においては精神療法の一つに「面接」をおくのであって、面接はラポールなる関係を意識的につくり出すことによつて、はじめて被面接者の欲求不満を解決することができるのである。だからこそラポールの存在否かが治療効果の要因としてあげられるのである。ケースワークにおける関係の利用でしばしば取上げられる「同一化」や「感情移入」は、すべてラポール形成を前提とした問題である。<sup>(10)</sup>

直観にもとづく共感こそラポールの本質であり、そのようなものを対人関係において創り出す努力が社会事業ワーカーの使命ではなからうかということについて、以上ベルグソンの思想の一端をよりどころとしつつ述べてきた。さらに一言ベルグソンの考え方を加えると、私は私の持続に生き、ビエールはビエールの持続に生きることが自由であるという所謂「自由」についての思想である。私は私、ビエールはビエールと夫々持続に生きることが自由であるならば、ベルグソンの自由とは個性的に生きることなのである。私とビエールは異つた個性をもつ。それ故人間一人一人が夫々の自由をもつのは持続のリズムを異にするからであつて、持続は過去から現在、現在から未来へと生成していくものである。実在とは生成である。生活史は実在であり持続でなければならぬ。このように考えるならば社会

事業ワーカーは対象者夫々のもつ持続のリズムにふれなければならぬ。まことにふれることによつてはじめて未来への生成に対する援助を行ふことができよう。これこそケースワークの核心であるともいえよう。さらに、人間一人一人が自由に生きるということはこの生成的な創造的持続に参与して生きることであり、自己の持続から宇宙にひろがる持続へ直観的努力によつて共感することである。ここに実はベルグソン哲学の最高峰がみられるのである。<sup>(11)</sup> ケースワークが常に取扱う生活史の問題が持続という概念で解明されるものであるならば、それに対するわれわれの認識もベルグソンのな思考に従わねばならない。すなわち、「持続とは何よりも精神を意味し、精神とは意識を、意識とは記憶を意味する」と<sup>(12)</sup>。われわれの任務はこれらの諸概念を具体的な事象としての生の構造のなかから把握することであり、それを可能ならしめるものが直観にもとづく共感——持続の直観であり、それが成立する関係概念がラポール (rapport) なのである。ラポールの本質について語るとき、ベルグソンの次の言葉が一つの真理を示しているように思う。言わく「直観からは分析へ移れるけれども、分析から直観へは移れない」と。<sup>(13)</sup>

### 三

直観に対する価値評価はわれわれを実存へと導く。すなわちドイツの哲学者フッサールによつて説かれた「事象そのものへ」という現象学的立場は、根源的で生き生きとした直観において与えられるもの以外のどんなものにも真理としての価値を認めないとするのがこれである。すなわち直観は公衆のうちに埋没している状態であろうと、不安でろあうと、あるいはまた絶望であろうとも、権勢欲であろうともすべての事象に直面する勇氣を要求するからである。フッサールにおける事象とは現象学的還元により明証性を欠く不確定な外在的なものを括弧のなかにいれてなお残る内部意識の世界であり現象であるわけである。このフッサールの事象そのものへという思想はハイデッガーとサルトル及びヤスバースに深い影響を与えたといわれる。すなわち

ハイデッガー↓ 現存在の実存論的分析

サルトル↓ 現象学的存在論

ヤスパース↓ 精神病理学総論

わけでもヤスパースは事象そのものに迫ろうとするフッサールの現象学的分析の方法に強い感銘を受け、病者の述べた症状そのものに迫る立場をとらんとしたのである。ところが症状それ自体は誰れが訴えようとも所詮それは症状一般でしかない。換言すれば誰れのものであってもいい症状である。ここでわれわれはヤスパースにおけるフッサール批判に問題の所在を見出さねばならないのであるが、批判への論理の展開は小論の目的ではないので割愛する。ともあれヤスパースは誰れのものでない所謂意識一般への接近と訣別し、おきかえることのできない一回限りの生の本質に迫ろうとしたのであり、それが彼における生の歴史(『生活史(Der Lebenslauf, Lebensgeschichte)の問題として取り上げられるに至った理由でもある<sup>(14)</sup>。それとともに「生活史的」方法によつて事象への接近を示した人はフロイトであつたといえよう。フロイトに道をひらいたものがニーチェであり、特に彼の反理性主義、盲目的意志の承認はフロイトを理解するのに重要であるという考え方もあるようであるが、<sup>(15)</sup>ともあれフロイトにおいては精神分析の立場から記述された病歴は、単なる病歴ではなくひとりの人間の物語りであるとみるわけである。生活史は極めて個人的であり、そのなかでの生起はすべて体験としての意味をもつ。ところがすべての体験はそれ自体としては意味はないであろうが、体験が生活史のなかにもちこまれてくる時点において価値をもつものである。この生活史における体験の価値、ここに生活史的方法による人間観が問われるであろうが、精神分析の場合をはじめ一切のケースワーク分野においては所謂ラポールの形成によつてそれ(価値)が分析者またはケースワーカーに把握されていくのである。ところでわれわれが現象学的方法をとる限りは、その思想系列からも明らかな<sup>(16)</sup>こく現存在(Dasein)とよばれる実存(Existenz)を問題としていかなければならない。現存在とはハイデッガーにおいては世界内存在であり、それはつまり状況のな

かに他者とともに存在するということである。現存在と持続とがともに人間観においてどのような相異がみられようとも、それを客観的にとらえていくための媒体こそラポールと呼ばれる一つの特異な関係概念であることを忘れてはならない。精神医学はこの関係概念を設定することによって現存在としての実存の分析に大きな発展を示している。

ラポールの本質は先にふれたごとくベルグソンの思考のもとにとらえることができたのであるが、哲学わけでも現象学的考察の発展と実存哲学と精神分析の関係理論の発展のもとで、その概念構造には変容がもたらされているようである。すなわちラポールそのものの客観的実在化の論証の問題でもあろうか。この点については他の機会に論述してみたいと考えている。

註(1) ベルクソン「哲学入門・変化の知覚」(思想と動くものI) 河野与一訳、岩波文庫版一三五頁。

(2) 同、一八一—一九頁参照。

(3) 同、二六頁。

(4) 同、二八一—二九頁。

(5) そもそもカントは悟性概念を純粹認識に堪えうるとしたばかりでなく、空間や時間をも直観形式として純粹認識の形式と考えたのである。ところがベルグソンによれば空間にこのような没利害の役割を帰するのは悟性の場合と同様に誤りである。そこでベルグソンはカントのいう空間の先天的形式性を批判するわけである。カントは空間を實在的媒質と考える素材在論者とは異って、空間を観念的媒質と考えたのである。それとともに空間は實在論的立場と同様に物がその内に入り得る為の必然的条件と考え、その条件において維多な感覚が並べられ、かくして同質的統一性を得ると考えたのである。

(6) 心理状態は物質的な外観を最も少く示すものを悉く取って自分のものとして置かなければならないから、『我の統一』は物質のない形式に他ならないことになる。ベルグソン「哲学入門・変化の知覚」(思想と動くものI) 河野与一訳、岩波文庫版二八頁。

(7) ベルクソン、「文庫」二九頁。

(8) 同、二九頁。高橋昭二、前掲書二八二頁。ハミルトン、三浦賜郎訳「ケースワークの理論と実際」上巻、

『ラポール』(Rapport)の本質についての考察(三浦)



